

司祭助祭 叙階式 教話 (2025-03-20)

福江教会主任司祭の中田輝次神父です。YouTubeで検索すればすぐに分かります。生涯に一度でいいから、叙階式の教話をしてみたいなと思っていました。思いがけずその機会が巡ってきました。二度目はないものと思ひ、精一杯務めたいと思ひます。

それは、洪助祭がやって来て半年くらい経った、台所でのことでした。歌が聞こえてきました。「この道は、主からの道。この道は、キリストのために。聖霊と共に歩む”主への道””わたしの道”」主任司祭は「だれか！『ミチミチ、ミチミチ』歌いよつとは」と思いつつ近づくと、洪助祭が朝食を用意していたのでした。私も経験がありますが、30分で朝食を準備するには、ほんとうにテキパキと作業しなければなりません。実に手際よく、歌いながら朝食を作る。すっかりこの生活に慣れてきたんだなと安心しました。

すべて審査員は、減点方式で採点します。私は洪助祭をあずかった者として、減点方式でこの一年間を見守っていました。減点の対象となる失敗に神経をとがらせておりました。減点が無かったわけではありません。ありましたが、気になることはときおり食事の席で話題にして乗り越えてきました。天国の洪聖範お父様にだけ、あとで教えます。

感心したのは、さまざまな人との出会いの中で、洗礼志願者を見つけてきたり、結婚を誓うカップルを導いてあげたりしたことで

す。私^{わたし}もかつて、新米^{しんまい}の助任^{じょにん}司祭^{しさい}の時^{とき}に、洗礼^{せんれい}志願者^{しがんしゃ}がやって来^こないか、結婚^{けっこん}を誓^{ちか}うカップル^こが来^こないか、玄関^{げんかん}をウロウロしていたことを覚えています。私^{わたし}は司祭館^{しさいかん}で待^まっただけでしたが、洪助祭^{ほんじょさい}は人^{ひと}との出^で会^あいの中^{なか}で、「囲^{かこ}いに入^{はい}っていないほかの羊^{ひつじ}」(ヨハネ 10・16)を^{さが}探^{たづ}んねてきてくれました。この一^{いち}年^{ねん}、減^{げん}点^{てん}があつても加^か点^{てん}の方^{ほう}が多^{おほ}かつた。そう思^{おも}っています。

主任^{しゅにん}司祭^{しさい}が助祭^{じょさい}に諭^{さと}されたこともありました。管轄^{かんかつ}する区^く域^{いき}内^{ない}には、四^{よん}人^{にん}で修^{しゅう}道^{どう}生^{せい}活^{かつ}をしてい^ちる小^{ちい}さな修^{しゅう}道^{どう}院^{いん}があ^ありますが、「ず^おっと同^{おな}じ姉^し妹^{まい}で暮^くらし続^{つづ}けるのは息^{いき}が詰^つまるよ^よね」とう^うっか^かり言^いったのです。すると洪^{ほん}助^{じょ}祭^{さい}から「それ^かは神^{かみ}様^{さま}の奇^き跡^{せき}です^せね。奇^き跡^{せき}が^な無^なければ、続^{つづ}きませ^いん^いね」と言^いわれ、う^うか^かつ^なこ^こを^いった^など反^{はん}省^{せい}したのです。洪^{ほん}助^{じょ}祭^{さい}と^くの暮^くらし^でむし^ろ教^{おし}え^られた一^{いち}年^{ねん}で^した。

ここからは助祭^{じょさい}叙^{じょ}階^{かい}を^ひか^か控^{くわ}えている廣^{ひろ}田^た神^{しん}学^{がく}生^{せい}と司^し祭^{さい}叙^{じょ}階^{かい}を^ひか^か控^{くわ}えている洪^{ほん}助^{じょ}祭^{さい}に共^き通^{つう}のお話^わし^です。仮^{かり}に、人^{じん}生^{せい}が百^{ひゃく}年^{ねん}あると^したら、お^お二^に人^{にん}は^すで^に半^{はん}分^{ぶん}の時^じ間^{かん}を^お折^かえ^か返^かして^いま^ます。私^{わたし}はザ^ざア^あカ^かイ^いが^がイ^いエ^えス^す様^{さま}に^い言^いった^こと^ば言^い葉^はを^{おも}い^だし^ます。「主^{しゅ}よ、わ^わた^たしは^{ざい}産^{さん}の^{はん}分^{ぶん}を^{まず}貧^ひしい^{ひと}々^とに^ほど^こ施^せし^ます。ま^また、だ^だれ^れか^かか^から^な何^{なに}か^かだ^だま^まし^し取^とっ^とて^いたら、^{よん}ば^いい^いを^かえ^か返^かし^ます。」(ル^るカ^か 19・18)

多^{おほ}く^くの^{ひと}人^{にん}は、人^{じん}生^{せい}を^お折^かえ^か返^かす^{とき}、こ^これ^まで^き築^ずい^てき^たもの^をこ^これ^から^の自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}の^{じん}生^{せい}設^せ計^{けい}の^ため^に使^{つか}う^のです^が、今^{いま}、お^お二^に人^{にん}は^{かみ}神^{さま}か^ら与^あえ^られた^{ざい}「財^{ざい}産^{さん}」^いと^も言^いえ^る人^{じん}生^{せい}の^{はん}分^{ぶん}を、^{ひと}人^{にん}々^との^ため^に施^せす^{けつ}決^{けつ}意^いで^{さい}祭^{さい}壇^{だん}に^あ上^あが^らう^として^いま^ます。今^{いま}ま

で身につけたものを喜んで人々に施すだけでなく、これからの残りの人生もまた、叙階の恵みを通して四倍にして返すために、その時を待っておられます。

叙階式に臨むお二人は、祭壇に掲げられている十字架のキリストを宣べ伝えることに集中してください。「十字架から降りて自分を救ってみろ」(マルコ 15・30)と今でも人々は心ない声を浴びせています。イエス様に成り代わって、なぜ十字架から降りないのかを、説教台から、また祭壇の上で伝えてください。そのためにまずは、イエスの十字架を生きていく人であってください。十字架を日々担うことで、私たちは十字架上のキリストを宣べ伝える資格を保ち続けるのです。

お二人は、イエス・キリストから雇われました。主のぶどう園に雇われたのですから、賃金を約束されたはずですが。それはいつ、どこで約束されたのでしょうか。私は、十字架上で兵士によってわき腹を刺し貫かれたとき、つまり「血と水が流れ出た」(ヨハネ 19・34) その時に代金が支払われたのだと考えています。

イエスのわき腹から血と水が流れ出ました。それを遠くから眺めていた人と、そば近くで眺めた人とで役割や責任の重さが違っていても不思議ではありません。お二人を含め、祭壇に上がる兄弟司祭たちはイエスの脇から流れ出る血と水に直接接触れる場所にいます。すべての兄弟姉妹が、一日一デナリオンの約束をいただいたと思いますが、叙階を受けた者の役割と重さは、遠くで眺めているほかの人々より重いのは自然なことです。

最終的に賃金は支払われます。「もっと多くもらえるだろう」
(マタイ 20・10) と欲を出してはいけません。兄弟司祭同士で「
最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日
、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱
いにするとは」(同 20・12) と、働きの多い少ないで不平を言っ
てはいけません。そもそも、「私はある兄弟司祭よりは働いた」とこ
ぼす必要はありません。私たちは、イエス・キリストが流された血
の一滴で、十分な賃金なのですから。

今年「2025年通常聖年」です。お二人も、叙階の秘跡を
受けた「希望の巡礼者」となります。巡礼を通して免償をいただ
くことは、自分自身が恵みを受けることと、神は常に恵みを届け
ようとしておられると人々に知らせること、両方を併せ持っていま
す。あなたが一つ巡礼指定教会を回るたびに、「希望は欺かない」
という教皇様のメッセージを一つ届けることとなります。2025年
聖年を機に、どこまでも神の恵みの働きを届ける人になってく
ださい。全世界に行き行って宣べ伝える人になってください。

これからも、人間的な面は残るかも知れません。周りの人を
悪く言って自分を守ろうとする弱さ。それは今後も続くかも知
れません。自分の主張を押し通そうとして周囲が振り回される。
叙階してもその傾向が無くならないかも知れない。そこは、兄弟
司祭、助祭との交わりの中で、互いに諫め合い、ゆるし合っ
て成熟していきたいと思います。そして教会共同体の皆さんも、キ
リストにおける兄弟姉妹として、この二人に必要な声かけをお願い

いた 致します。「神父様^{しんぶさま}にそんな忠告^{ちゅうこく}はできない」と思^{おも}っておられる
かた 方に、ぜひ忠告^{ちゅうこく}を引^ひき受^うけていただきたいです。

ここに立^たつ私^{わたし}も、不足欠点^{ふそくけってん}があります。浦上教会^{うらかみきょうかい}時代^{じだい}は当時^{とうじ}
の主任司祭^{しゅにんしさい}に諫^{いさ}められました。これまで私^{わたし}がかけた迷惑分^{めいわくぶん}を、四倍^{よんばい}
にして返^{かえ}していく以外^{いがい}に償^{つぐな}う道^{みち}はありません。この教話^{きょうわ}を、共^{とも}に
歩^{あゆ}む兄弟司祭^{きょうだいしさい}の分^わかち合^あいとして、説教台^{せつきょうだい}に置^おきたいと思^{おも}いま
す。そして心^{こころ}を一^{ひと}つにして、「もう一人^{ひとり}のキリスト」の誕生^{たんじょう}を迎^{むか}
えましょう。